

第六章 逆接確定条件

逆接確定条件は、前件と後件とがともに既知の事柄からなり、「～ノニ」「～テモ」で結び付く条件表現である。特に、「～テモ」は、前件と後件の両方が未知の事柄か既知の事柄かによって、順接仮定・逆接仮定条件と逆接確定条件とに分けられる。ところで、逆接確定条件は、文面では、前件が起こったにも関わらず後件の成り立たなかったことを表わしているが、このことは、順接仮定条件「 p ナラバ q 」との食い違いを想定してこそ成り立つわけである¹⁾。以下、「～ノニ」「～テモ」で結び付く逆接確定条件の論理構造を分析し、論理式で記述する。

1 「～ノニ」形式

¹⁾ 言語学研究会・構文論グループ(1986:50)は、逆接確定条件について、つきそい文には、原因としてはたらくことのできなかつた出来事、つまり「 \langle うらめ原因 \rangle 」をさしだしているわけだが、この「 \langle うらめ原因 \rangle 」は事實的でもあるし、条件的でもある。……うらめ原因的な関係が事實的であれば、つきそい文にさしだされる出来事もいいおわり文にさしだされる出来事もリアルに存在している。……それが事實的であれば、「するのに」によつても、「しても」によつても表現されて、つきそい文の述語を相互にとりかえることができるということになる。と述べている。ただし、うらめ原因的な関係が条件的とは、第五章で述べたように、逆接仮定条件のことである。

1.1 意味構造

「～ノニ」が発話されうる場面としての意味構造を考察する前に、今日まで、「～ノニ」がどのように扱われてきたかということについて触れておくことにする。

益岡・田窪(1992)は、「～ノニ」は、「ある事態が成立するのに伴って別の事態も成立すると予想されるのに、実際にはその予想が成り立たないということを表す。あるいは、ある事態から、別の事態が成立すべきだと考えられるのに、その期待が裏切られることを示す」と述べている。小泉(1987;4-5)は、逆接仮定条件と逆接確定条件を合わせて譲歩文と呼び、

譲歩文は、前件の条件が満たされたのに期待される結果が得られなかったことを表明する文である。ある条件文を予定して、これに従って行動したのに逆の結果になってしまったことを遺憾の意をこめて語る文である。

と述べている。そして、条件表現における譲歩文の位置付けは、次の文により、明らかである。なお、小泉(1987)のいう譲歩文とは主に逆接確定条件「～ノニ」を指している。

要するに、条件文の結果的肯定が理由文であり、その結果的否定が譲歩文である。いま、相互に深くかかわっている理由文と条件文と譲歩文のトリオに「論理文」という一般的名称を与えれば、論理文の中では、条件文を中心にして、理由文と譲歩文が相反する関係に立っている。

さらに、小泉(1987;7-8)は、譲歩文が条件文と理由文を結びつける、次の(1)のような構造が譲歩文の本質を示しているとし、(2)の例を挙げている。

- (1) pであればqである (条件文) けれども<譲歩>、rであるから～qである (理由文)
- (2) 努力すれば、成功するはずであったのに、運が悪かったので、成功しなかった。

(2)に対して、小泉(1987)は、

すなわち、前半の条件文が成立しないのは、後半の理由によると解説しているわけで、(2)の条件文の「成功する」という結果を導くには、「努力する」という条件だけでは不十分で、結局「成功しなかった」という逆の結果を招いてしまった。それは「運が悪かった」という原因によるものであったと説明している。要するに、譲歩文には「pであったのに、rであったから、qでなかった」という推意が根底に働いていて、条件文「pであれば、qである」が成立しなかったのは、rに起因すると述べているように思える。

と述べ、「とくに、原因に触れない場合が普通の譲歩文となる」としている。小泉(1987)は、「pノニ~q」の根底には「pノニrカラ~q」が働いていると見なしているわけであるが、このことは、逆接仮定条件「pデモ~q」を「pデモrナラバ~q」と見なしている坂原(1985)とも相通じる。

このように、逆接確定条件「~ノニ」は、順接仮定条件「pナラバq」との関わりがなければ発話できない。次の(3)のような「~ノニ」は、文面では、【4】を表わしていても、その背後には、【5】のような構造が隠されているわけである。

(3) 努力したのに、成功しなかった。

【4】 努力した。成功しなかった。

【5】 努力するトキ、成功することはなく、カツ

努力するトキ、成功せず、カツ

努力しない（後件が成立しうる条件が起こらない）トキ、成功することはなく、カツ

努力しない（後件が成立しうる、努力する以外の条件があり、その条件が起こる）トキ、成功しないことはない。

(3)の基底の意味構造の【5】は、順接仮定条件「pナラバq」の否定である逆接仮定条件の意味構造と同じである。このことから、逆接確定条件と順接仮定条件との関わりが分かる。

1.2 論理構造

1.2.1 「(既知)ノニ(既知)」形式

(3)の「努力したのに、成功しなかった」の文面の意味構造と基底の意味構造の【4】と【5】に1と0を当てた論理構造を論理式で表わすと、次のようになる。ただし、(3)では、「努力する」と「成功しない」は既に知っている事柄であり、「努力する」をp、「成功しない」をqとする。

$$(6) F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)^{2)}$$

(6)において、「 \equiv 」の左方は、「 \sim ノニ」の前件と後件がともに既知の確定条件であることを表わす文面の意味構造で、「 \equiv 」の右方は、含意の順接仮定条件を否定する逆接条件であることを表わす基底の意味構造である。そして、 $\sim q$ は「成功する」を表わし、「 \equiv 」の右方の「 $\sim (p \supset \sim q)$ 」は、「(努力すれば、成功する)の否定」、つまり「努力しても成功しない」を表わすものである。ここで、「努力すれば、成功する」が「 $p \supset \sim q$ 」になるのは、既に知っている「成功しない」をF(q)としているからである。そのため、「成功する」をqとする「 $\sim (p \supset q)$ 」と「成功しない」をqとする「 $\sim (p \supset \sim q)$ 」は、両方とも「努力しても成功しない」を表わすわけである。このことは、先の【5】を見ても分かる。「 \sim ノニ」は、「 \sim ノニ」と後件が逆の順接仮定条件を想定しているが故に、食い違

²⁾ 草薙(1977)は、「 \sim ノニ」を、普通考えられる含意を否定するものだとし、「 $p \wedge \sim q \equiv \sim (p \supset q)$ 」で表わしている。なお、草薙(1977:103)は、接続助詞「 \sim ガ」は連言から含意を否定するものだとし、逆接確定条件「 \sim ノニ」の論理構造と一致する「 $p \wedge \sim q \equiv \sim (p \supset q)$ 」と示しているが、本研究では「 \sim ガ」は研究対象に入れていない。

ところで、「 \sim ノニ」は、等値の否定を「 \equiv 」の右方に持つ「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \equiv \sim q)$ 」のようには表わせないが、それは、逆接仮定条件が「含意の否定」でしか表わせないからである。このことについては、第五章を参照すること。逆接条件に関わる「pナラバq」は、含意「 $p \supset q$ 」の論理構造を持つものということが言える。

いの意味合いを感じさせるのだと思われる。実例を見てみる。

(7) 「狭いアパートの部屋に閉じこもって、絵を描いてると、苛々してくるんだ。

自分の望んだ生活をしてるのに、会社勤めをしてるときよりも苛々するんだ」

(花)

(7)において、「自分の望んだ生活をする」をp、「苛々する」をqとすると、(7)は、「自分の望んだ生活をすれば、苛々しない」を想定していたが、思う通りにならず、現に想定文の前件が起こったにも関わらず想定文の後件が成り立たないということを表わしているわけである。他に、次のような例が挙げられる。

(8) 熱いシャワーを浴びたのに、芯から暖まってはいない体を横たえ、典子も湯

気が目にしみるほど濃いホットブランデーを飲んだ。 (花)

(8)は、「熱いシャワーを浴びる」をp、「体が暖まらない」をqとする「～ノニ」文であり、「熱いシャワーを浴びれば、体が暖まる」を想定している。そのため、「熱いシャワーを浴びた」と「体が暖まっていない」が既知であることを示すのみである、単なる「 $F(p) \wedge F(q)$ 」だけではなく、pと $\sim q$ の間の含意関係が否定「 $\sim (p \supset \sim q)$ 」されているものだという事とも、(8)には組み込まれているわけである。

さて、言語学研究会・構文論グループ(1986;54-55)は、「～ノニ」に「背後にかくれているはずの条件的な判断がよみとれない」場合があるとし、次のような例を挙げて、以下のように述べている。

(9) できあがってきた写真は、私のたのしい期待をうらぎっていた。腰かけている千代子は、ちゃんとうつつているのに、そばにたっている私はずんぐりし

ていて、頭でっかちにみえた。

そのときには、つきそい文にさしだされる出来事がうらめ原因であることをやめていると、みなさなければならぬ。そして、ふたつの出来事の対照だけが前面におしだされている。対照的な意味へ移行している、うらめ的なつきそい・あわせ文では、おなじ状況におかれている、ふたつの物がなんらかの原因でことなる動作・状態をもっている、という現実がえがきだされている。そのようになることの原因については、なんらかたらない。結果のくいちがい、ちぐはぐさが前面にでている。……この種のつきそい・あわせ文では、対照させられる、ふたつの出来事のうちのひとつが、いいおわり文にさしだされようと、つきそい文にさしだされようと、意味にはかわりがない。したがって、いいおわり文とつきそい文とが位置をとりかえることができる。

構文論グループ(1986)によれば、(9)は、逆接確定条件の、いわば当て外れの「～ノニ」とは異なる、対照の「～ノニ」だとされる。(9)は、同じ状況の、前後対称的な二つの事柄が時間的順序なしに同時に行われており、その前件と後件に格助詞「ハ」が付くことにより、対照の意味合いが強く感じられる。(9)のような対照の「～ノニ」は、想定条件文を持たないため、「～ノニ」の前件をF(p)、「～ノニ」の後件をF(q)とすると、(9)は、

(10) $F(p) \wedge F(q)$

と表わされる。(10)は、「 $F(q) \wedge F(p)$ 」のように、前件と後件の順序が逆でもかまわない。このときの(9)の「～ノニ」の前件と後件は、単に「片方は～である。一方、片方は～である」のように結び付いているだけなのである。ただし、(10)のような構造は、条件を表わすものではない。つまり、(10)の論理構造を持つ対照の「～ノニ」は、条件表現の枠には入れられないのである。ところで、(9)の「～ノニ」は、「千代子がちゃんとうつる」をp、「私はちゃんとうつらない」をqとして、次の、

(11) 千代子がちゃんとうつれば、私もちゃんとうつる。

のような想定文の後件が成り立たなかったことを表わす「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$ 」の論理構造のものと見ることもできる。

以上のことから、「 \sim ノニ」は、基本的に「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$ 」の論理構造を持つが、(9)のように、前後対称的な事柄を持つ場合は、「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$ 」のみならず、「 $F(p) \wedge F(q)$ 」の論理構造をも持つのだと言える。前後対称的な事柄を持つ「 \sim ノニ」には、次のような例が挙げられる。

(12) 「ワタナベ君、あなたってすごいわねえ」と縁は感心して言った。「あの人もものを食べなくてそれでみんなすごく苦労してるのに、キウリまで食べさせちゃうんだもの。信じられないわね、もう」 (森(下))

(12)では、「(あの人にものを食べさせるのに) みんな苦労する」が p 、「(あの人にものを食べさせるのに) あなたは苦労しない」が q であり、「(あの人にものを食べさせるのに) みんな苦労するならば、あなたも苦労する」を想定したが、想定通りにならないことを表わしている。その一方で、(12)は、「(あの人にものを食べさせるのに) みんな苦労する」と「(あの人にキウリまで食べさせちゃうほど) あなたは苦労しない」とが対照的であるとも解釈でき、その場合、それぞれを $F(p)$ 、 $F(q)$ とすると、「 $F(p) \wedge F(q)$ 」と表わすこともできる。他には次の例が挙げられる。

(13) 彼の方は同じプロセスでどんどん上に進んで行ってるのに、僕の方はずっと堂々めぐりしてるんです。 (森(下))

(13)は、「彼が上に進んで行けば、僕も上に進んで行く」が想定される「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$ 」であるとも、 $F(p)$ の「彼は上に進んで行っている」と $F(q)$ の「僕はずっと堂々めぐりしている」が対照的に結び付く「 $F(p) \wedge F(q)$ 」であるとも解釈できる。こ

これは、(13)が二つの論理構造を持つことによるものである。

さて、「～ノニ」には、次のように、逆接確定条件を表わすとも、対照を表わすとも言いがたい場合がある。例えば、

(14) 彼が来れば、彼女はよろこんだのに、彼が来なかったから、彼女はよろこばなかった。

は、反事実的ナラバ文と理由文という複合命題がそれぞれ「～ノニ」の前件と後件になっている。(14)の「～ノニ」は、一見、対照とも思われる。ところが、実際は、「～ノニ」の前件の「彼が来れば、彼女はよろこんだ(のに)」と「～ノニ」の後件の「彼が来なかったから、彼女はよろこばなかった」とは同じことを表わしており、何よりも、(14)の文全体と「～ノニ」の前件とが同じことを表わしている。そのため、(14)を、対照の「 $F(p) \wedge F(q)$ 」であると見ることはできない。ところで、小泉(1987:8)は、(14)を「反事実的条件文と理由文を譲歩文の形で組み合わせた複合論理文³⁾」と見なして、「通例、理由文は言わなくても分かるので、反事実条件文の後に譲歩の助詞「のに」を付加しただけで文を終えることが多い」と述べている。しかし、逆接確定条件は、想定 of 順接仮定条件を必ず持っているものであるため、(14)のように、想定する条件文を持たない「～ノニ」を、逆接確定条件と見ることはできないと思われる。(14)は、単なる反事実的ナラバ文、または順接確定条件と扱うべきであろう。(第四章参照)

³⁾ 小泉(1987)は、例えば、「pであっても、qであるから、rである」を理由文を含む譲歩文とするなど、論理文を構成する理由文、条件文、譲歩文を相互に組み合わせて表現する形式を複合論理文と呼んでいる。

2 「～テモ」形式

2.1 意味構造

次の(15)のように、二つの既知の事柄が「～テモ」で結び付くと、「～ノニ」と同じく逆接確定条件を表わすようになる。

(15) 一週間たつても電話はかかってこなかった。 (森(上))

(15)は、文面では、次の【16】を表わしているが、その背後には、【17】のような意味構造が隠されている。

【16】 一週間たった。電話はかかってこなかった。

【17】 一週間たったトキ、電話がかかってくることはなく、カツ

一週間たったトキ、電話がかかって来ず、カツ

一週間たたない (後件が成立しうる、唯一の条件の「一週間たつ」が起こらない) ト

キ、電話がかかってくることはなく、カツ

一週間たたない (後件が成立しうる、「一週間たつ」以外の条件があり、その条件が

起こる) トキ、電話がかかってこないことはない。

(15)のような「～テモ」は、【16】の文面の意味構造と【17】の基底の意味構造がともに成り立った場面で発話されるわけである。ただし、(15)を発話する際、話者が【17】の基底の意味構造を成す組み合わせをすべて想定しているとは限らない。

2.2 論理構造

2.2.1 「(既知) テモ (既知)」形式

(15)の「一週間たつても電話はかかってこなかった」において、「一週間たつ」をp、「電話はかかってこない」をq、既知のpをF(p)、既知のqをF(q)とすると、(15)は、次のように表わすことができる。

$$(18) F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$$

(18)の論理式は、「～ノニ」の論理構造と同じである。このことは、異なる言語形式が同じ論理構造を持つ一例として考えることができよう。次の例を見てみる。

(19) 昔は、雪が降っても傘などささなかった、おぼえてますか？ (女(上))

(19)で「雪が降る」をp、「傘をささない」をqとすると、(19)は、想定していた「雪が降れば傘をさす」という想定文通りに行かず、想定文の前件が起こったにも関わらず、想定文の後件は起こらなかったことを表わす逆接確定条件である。つまり、逆接確定条件に用いられる「～テモ」の前件と後件は既知の事柄で、二つの事柄は想定している順接仮定条件の否定の関係なのである。他に、次のような例が挙げられる。

(20) 水曜日の十二時になつても緑はそのレストランに姿を見せなかった。(森(上))

なお、同じ論理構造を持つ、異なる言語形式の「～テモ」と「～ノニ」の相違点については、第3節で考察を行うことにする。

3 「～ノニ」と「～テモ」の相違点 —残された問題—

逆接確定条件を表わす「～ノニ」と「～テモ」は、同じ論理構造のものが別の言語形式として現われている例である。「～ノニ」と「～テモ」は、前もって想定していた順接仮定条件が成り立たず、想定文の前件は起こったが、その後件が起こらなかったことを表わすものであり、想定文の前件を p 、想定文の後件を $\sim q$ 、既知の前件を $F(p)$ 、既知の後件を $F(q)$ とした場合、「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim(p \supset \sim q)$ 」と示される。このように、「～ノニ」と「～テモ」は同じ論理構造のものであるにも関わらず、お互い置き換えられない場合がある。今日までの研究は、逆接確定条件「～ノニ」と逆接仮定条件「～テモ」との違いに関する考察がほとんどであり、逆接確定条件と逆接仮定条件が区別されないことも多い。以下、「～ノニ」と「～テモ」の相違点に触れておきたい。

3.1 逆接確定条件「～ノニ」と順接仮定・逆接仮定条件「～テモ」

今日までの研究を踏まえて、順接仮定条件「～テモ」及び逆接仮定条件「～テモ」との対照から浮かび上がってくる逆接確定条件「～ノニ」の特徴を見てみることにする。

鈴木(1978;249-250)は、次の(21)の「～ノニ」と(22)の「～テモ」に対し、以下のように述べている。

(21) 雪は夜になったのにやみませんでした。

(22) 雪は夜になってもやみませんでした。

(21)は、「雪が夜になれば、とうぜんやむ」といった期待がもたれての発言であるが、それにもかかわらず「まだ降っている」といった意外・不満といったものがこめられている。……(22)は、「夜に

なる」ということと「雪がやむ」ということとの間には対比・照応といった関係はなく、「夜になる」は「雪がやまない」に対して、状況的・例示的な意味あいしかもっていない。

さらに、(22)の「～テモ」の特徴は、仮定条件の場合にも同じであるとしている。つまり、鈴木(1978)は、「～テモ」の前件を後件の成立のための一例と見ているのであり、(22)は、「pナラバ (sナラバ) q」の「～ナラバ」が「～テモ」に変わった「pテモ (sテモ) q」の例とされている。このことから、鈴木(1978)は、「～ノニ」は想定条件文を持つ逆接条件と見ているものの、「～テモ」に対しては順接条件のことを指しているように思われる。

才田(1980)は、鈴木(1978)と同じく、「～ても」は状況的・例示的な意味あいを持っていて、「のに」は前後件の間に対照・対比・照応の関係がある」としており、アルフォンソ(1966)を引用して、「～ノニ」と「～テモ」の違いを説明している。アルフォンソ(1966)を再引用し、それぞれの例を挙げておく。

- (a) 「のに」は客観的対比を示す場合のみに用いられる。……「ても」は用法の範囲がより広く、後件が客観的事実を表す場合にも主観的表現の要素を含む場合にも用いられる。
- (b) 「のに」は現在又は過去の対比を示す場合に用いられ、未来や蓋然的な対比は示さない。……「ても」は「のに」よりも明確さに於て劣るので、何が起こるか（あるいは起こらないか）全く確信の持てない場合にも用いることが出来る。
- (c) 「ても」は通常、ある特定の時を表す表現と共に使われない。……「のに」には明確さという含蓄があるので、上記のような状況（→特定の時と共起する状況）にはぴったりと合う。

- (a) *山は低いのに注意して登りなさい。
山は低くても注意して登りなさい。
- (b) *走って行くのに間に合わないでしょう。
走って行っても間に合わないでしょう。
- (c) *昨日買つても（もう）こわれている。
昨日買ったのに（もう）こわれている。

アルフォンソ(1966)の (b) の説明を見ると、「～ノニ」は確定条件を、「～テモ」は仮定条件と

確定条件の両方を表わすことが分かる。アルフォンソ(1966)の挙げている例(a)と例(b)は確定条件とは見られず、(c)のみ確定条件であるが、(a)と(b)の「～ノニ」が不自然で、(c)の「～ノニ」が自然なのは、「～ノニ」が逆接の確定条件だからである。(a)は「山が低ければ注意を怠る」、(b)は「走って行けば間に合う」を想定している逆接の仮定条件であって、「～テモ」が用いられる。ところで、「～テモ」は逆接仮定条件にも逆接確定条件にも用いられる言語形式なのに、(c)では、「～テモ」は不自然な文になってしまう。これによって、「～テモ」が逆接確定条件として使われる時には何かの制限があることが分かるが、(c)の説明からその答えが得られると思われる。この逆接確定条件「～テモ」と「～ノニ」の相違に関しては、3.2節で考察することにする。

さて、才田(1980)は、アルフォンソ(1966)の(a)に関する考察を行なっているが、「命令形や意志形は主観的表現といわれている」として、「こうしたものは「～テモ」と共起するのが普通であるが、命令形も場合によっては「のに」と共起することがある」といい、次のような例を挙げている。

(23) a. 呼ばれないのに返事をするな。

b. *呼ばれなくても返事をするな。

(24) a. *呼ばれたのに返事をするな。

b. 呼ばれても返事をするな。

才田(1980:44-45)によると、(23)の前件と後件は、「呼ばれないのだから、返事をしてはいけない」という順接の関係にあり、(24)の前件と後件は逆接の関係にあるが、逆接の場合「～ノニ」は非文法的な文を作るとされる。そして、その理由は、

「返事をする」ということは、「呼ばれる」という刺激に対する極めて自然な反応であると言える。(24)では、その自然な反応に対して「な」という禁止を表す終助詞が付いているから、前件と後件は逆接の関係を構成している。それにもかかわらず、(24) aが非文法的な文になるのは、禁止の「な」が、「呼

ばれたら返事をする」ということ全体を禁止しているためであるからだと考えられる。つまり、(24)aで「のに」が結びつけているのは、「呼ばれる—返事をする」という順接の関係にあることがらであるということになるから、(24)aは非文法的な文になってしまうのである。それに対して(24)b.「呼ばれても返事をするな」は適格な文である。これはもちろん、「ても」が順接関係にあることがらを結びつけるからではなくて、禁止の「な」が後件にだけ影響を及ぼしているからなのである。

と述べられている。確かに、才田(1980)の言う通り、(23)と(24)のような、否定命令や禁止を示す文では、「～ノニ」と「～テモ」が区別され、禁止の終助詞「な」が、

(23') a. [呼ばれないのに返事をする] な。

(24') b. 呼ばれても [返事をするな]。

(23') a. のような「～ノニ」の場合には、「呼ばれないのに返事をする」という文全体に、(24') b. のような「～テモ」の場合には、「返事をする」という後件だけにかかっている。しかし、このことは、否定命令や禁止の終助詞「な」の問題というより、「～ノニ」文と「～テモ」文の構成要素から考えて当然のことである。つまり、「～ノニ」と「～テモ」はそれぞれ上の [] の中の要素で成り立っているのである。そこで、

(23'') a. [呼ばれないのに返事をする] 。

(24'') b. 呼ばれても [返事をしない] 。

において、(23'') a. の場合は、「～ノニ」文に終助詞「な」を付けて禁止の意味にすることができる。ところが、(24'') b. の場合は、「～テモ」の後件自体が否定されていなければ「～テモ」文は成り立たないのであって、(24'') b. のように終助詞「な」が付いていてもこれは後件の要素に他ならない。(23) a. は、「呼ばれなければ返事をしない」を想定していたにも関わらず、「呼ばれないのに返事をしてしまった」ことに対する否定命令である。一方、(24) b. は、「呼ばれれば返事をする」を想定しており、「呼ばれても返事をしなかった」ことに

対する否定命令とはならないのである。よって、(23)aは既知の事態を表わす逆接確定条件で、(24)bは未知の逆接仮定条件だと言える。ただし、逆接仮定条件「～テモ」を「～ノニ」と置き換えるところから、「～ノニ」の不自然さが浮かび出てくる、つまり範囲の異なる「～テモ」と「～ノニ」を比べている、アルフォンソ(1966)の(a)と(b)や才田(1980)の(24)は、同じ論理構造を持つ異なる言語形式の考察にはならない。アルフォンソの(c)や才田の(23)のように、前件と後件に既知の事柄を持っていながら、「～ノニ」は自然で、「～テモ」は不自然になるような現象を考察することによって、逆接確定条件同士の違いが見い出されると思われる。

言語学研究会・構文論グループ(1986;50-51)は、事実的な、うらめ原因的な関係が「するのに」と「しても」の両方によって表現されるとしながらも、両方のうらめ原因的な関係の成立の過程はまるっきり反対だとしている。まず、「～ノニ」については、

つきそい文の述語が「するのに」のかたちをとるばあいでは、はなし手の意識のなかに前提としての《条件的な判断》が存在していて、はなし手はこの判断にتراしあわせながら、ふたつの出来事のあいだのうらめ原因的な関係を確認している。……はなし手の論理にしたがえば、当然おこるべき出来事がおこらなかったのであるから、そこにははなし手のがわからの《あてはずれの感情》がつきまとう。

と述べている。一方、「～テモ」については、

つきそい文が「しても」のかたちを述語にするばあいでは、……はなし手がみずからの条件的な判断に تراして、ふたつの出来事のあいだの関係をとりむすんではない……。……/あたらしい、べつの状況があたえられても、まえとおなじように出来事が成立している/というような事情がえがかれている。……はなし手はつきそい文のなかにその出来事の成立にとって不都合な、妨害的な状況を設定する。ところが、いいおわり文のなかにさしだされる出来事はこの状況に無関心に成立している。

としている。また、「状況の変更が出来事にいかなる影響もあたえない、という客観的な事実の描写」である「～テモ」が逆接条件となることについては、

つきそい文にさしだされる出来事が原因としてはたらいて、あたらしい出来事を成立させるはずなの
であるが、そのあたらしい出来事を成立させずに、まえどおりの出来事が生じているとすれば、うら
め原因的な関係が成立してくる。ふたつの出来事のあいだにうらめ原因的な関係がなりたっているか、
なりたっていないかということの判断は、はなし手なりよみ手なりがふたつの出来事のあいだの関係
を条件的な判断にてらしあわさなければ、なりたないのだが、この条件的な判断は客体の論理であっ
て、経験によって証明される常識である。

と述べている。さて、構文論グループ(1986)で、《条件的な判断》はキーワード扱いされ
ているが、「～ノニ」における話し手の意識の中に存在する条件的な判断と「～テモ」におけ
る常識としてのそれとの区別がはっきりしない。「～ノニ」と「～テモ」は、話者が前もって
想定していた《条件的な判断》があって、それと違った結果になるところに逆接条件の読
みが出てくるものであり、従って、これら二つの形式を特に分ける必要はないと思われる。
なお、上の引用の点線部は想定している条件文の誘導推論を指しており、実線部はその誘
導推論が成り立たないことを表わしているものである。つまり、条件的な判断として「p
ナラバq」を想定していたとすれば、点線部は「～pナラバ～q」を、実線部は「～pテモ
q」を表わしているのである。しかし、順接仮定条件が誘導推論の意味を含んでいるとし
ても、順接仮定条件の意味と誘導推論の意味とが完全に一致するわけではなく、点線部通
りになるとは限らない。そのため、実線部に記されているように、「～pナラバ～q」に対
して「～pテモq」が逆接の関係にあっても、もともとの想定文の「pナラバq」と「～p
テモq」とが逆接の関係にあると見ることはできない⁹⁾。さらに、構文論グループ(1986;58)
の次の叙述からも分かるように、構文論グループの「しても」は逆接条件というより、む
しろ対比の順接条件と見られるものである。

⁹⁾ 坂原(1985;132)は、「～pでもq」を、「pでも～q」同様「pならばq」の否定だとは見るものの、「こ
の場合の否定は、条件文そのものではなく、条件文の誘導推論を否定している」としている。例えば、「～p
でもq」の(B)は、条件文(A)の誘導推論である(C)の否定だということである。

- (A) コーヒーを飲めば眠れなくなるぞ。
- (B) コーヒーを飲まなくても眠れないさ。
- (C) コーヒーを飲まなければ眠れる。

つきそい文の述語が「しても」のかたちをとるつきそい・あわせ文は、うらめ原因的な関係というよりも、むしろ「ゆずり状況的な関係」を表現している。…はなし手は、あたらしい状況をつきそい文のなかに設定するにあたって、いいおわり文にさしだされる出来事の実現にとっては、より不都合なものに、あるいは反対に、より好都合なものに譲歩しているとすれば、そのあたらしい状況なるものは「ゆずり状況」ということになる。

構文論グループ(1986)の、「～ノニ」と「～テモ」の区別は、逆接条件と順接条件の区別にとどまっており、逆接確定条件としての「～テモ」に関する分析は行われていない。

一方、戸村(1988)は、「～ノニ」と「～テモ」は前提とする条件文が異なっているとし、「～ノニ」と「～テモ」の論理関係を表わす式を次のように示している。

(25) 条件文	:	p ならば q	(26) 条件文	:	¬p ならば ¬q
前提	:	p の時 q	前提	:	¬p の時 ¬q
S1ノニS2	:	p の時 ¬q	S1テモS2	:	p の時 ¬q

戸村(1988;128-129)は、これらの「～ノニ」と「～テモ」について、

「S1ノニS2」は [pならばq] という条件文を真と前提として [pの時¬q] が真となっているという前提とのズレを主張する文である。

「S1テモS2」では、S2で表される内容の実現に対して、S1 (想定し得る阻害要件) が妨害の機能をもたないことが述べられているのである。これらのことから、「～テモ」の「モ」は「～モマタ同様ニ(also)」の意味を表す、いわゆる「取り立ての‘モ’」であると考えられる。

と述べている。この叙述と(26)の「～テモ」の論理関係から、戸村(1988)の言及している「～テモ」は、後件肯定「p \supset q」の順接仮定条件であることが分かる。「～テモ」に関するこのような見方は、言語学研究会・構文論グループ(1986)と同じであり、逆接条件とは関わりがない。特に、戸村(1988)は、(26)の「～テモ」は仮定条件以外に確定条件も表わすとして、確定条件しか表わせない(25)の「～ノニ」と対比させている。仮に、戸村(1988)の「～テモ」が

逆接条件であるとしても、戸村(1988)は、確定条件同士の対比ではなく、逆接確定条件「～ノニ」と逆接仮定条件「～テモ」との対比の考察になるわけで、逆接確定条件「～ノニ」と逆接確定条件「～テモ」の相違を明らかにすることは出来ないと思われる。

3.2 逆接確定条件「～ノニ」と逆接確定条件「～テモ」

「～ノニ」と「～テモ」の相違点を論ずる、今日までの研究の多くにおいて扱われている「～テモ」は、ほとんどが順接仮定の条件表現である。逆接仮定条件「～テモ」と逆接確定条件「～ノニ」が比べられても、それぞれの論理構造が異なっているため、その表わす意味内容が異なってくるのは当然のことであろう。本節は、逆接確定条件としての「～ノニ」と「～テモ」との相違点を探るのが目的である。そこで、先のアルフォンソ(1966)の(c)の例のように、逆接確定条件であるにも関わらず、「～ノニ」と「～テモ」が置き換えられないばかりか、どちらか片方が不自然になることがあるのはなぜなのか、分析していきたい。

まず、「～ノニ」「～テモ」と副詞相当語句との関係を見るため、以下に、先のアルフォンソ(1966)の、(c)の説明とその例をもう一度記しておく。

- (c) 「ても」は通常、ある特定の時を表す表現と共に使われない。……「のに」には明確さという含蓄があるので、上記のような状況(→特定の時と共に起る状況)にはぴったりと合う。

┌ *昨日買っても (もう) こわれている。
└ 昨日買ったのに (もう) こわれている。

ただし、上の例の「昨日」の代わりに「明日」を入れるとすると、「～ノニ」も不自然になることから、ある特定の時を過去の時と限定しなければならない。また、先の(19)のように過去の特定の時と共に起る「～テモ」もあるが、この場合、「～ノニ」は過去の特定の時と共に起れない。(19)を再び記しておく。

(19) 昔は、雪が降っても傘などささなかった、おぼえてますか？ (女(上))

(19)* 昔は、雪が降ったのに傘などささなかった。

(19)や(19')には、「昔」という過去の特定の時が表わされているにも関わらず、その結果はアルフォンソ(1966)と逆になっている。ただし、(19')は「昔は」がなければ落ち着きがよくなる。この「昔」とは、時間の幅のある一定期間であることから、「～ノニ」はある程度の時間の幅を持つ語句とは共起しないと言えよう。このように、「～ノニ」が時間の幅を持つ語句と共起しないのは、言語学研究会・構文論グループ(1986;52)が、「～ノニ」では、「つきそい文にさしだされる出来事もいいおわり文にさしだされる出来事も、ほとんどが一回きりの、具体的な動作・状態」だと述べていることから分かるように、「～ノニ」は一回的な事柄を表わしているからだと思われる。つまり、「～テモ」は時間の幅のある過去の特定の時と、「～ノニ」は時間の幅のない過去の特定の時とそれぞれ共起しているのである。

さらに、「～ノニ」は「いくら」とも共起しない。しかし、「～テモ」の場合、「いくら」は仮定条件の時だけでなく確定条件の時にも共起する。例えば、「食べても食べても」のような反復型は「いくら食べても」のように言い替えることはできても、「いくら食べたのに」のように言い替えられない。また、「いくら起こしても起きなかった」のような確定条件の場合も「～ノニ」とは共起できない。「いくら p テモ」は「何度 p テモ」と大体同じであるが、これは、「～テモ」が反復的な事柄を前件に持つことができるということと関わっていると思われる。上の(19)は、「いくら」を入れることで、「～テモ」が反復的な事柄であることを強調することができる。また、「～ノニ」は、「たとえ、もし」などとも共起しないが、これは、「～ノニ」が確定条件であるためである。そのため、「たとえ、もし」などは確定条件「～テモ」とも共起しない。例えば、

(27) たとえ努力しても、成功しなかった。

は、反事実的テモ文として成り立つものであって、逆接確定条件としては成り立たないの
である。そして、「何、誰」のような不定語は、「～テモ」としか共起せず、

(28) 誰が何と言っても、彼は自分の決心を変えなかった。

のような「～テモ」は「～ノニ」とは置き換えられない。

ところで、時を表わす語のない、例えば、先の鈴木(1978)の例の、

(21) 雪は夜になったのにやみませんでした。

(22) 雪は夜になってもやみませんでした。

は、両方とも自然である。(21)と(22)は、論理構造は同じであっても、それぞれの解釈には
微妙な違いがある。(21)の「～ノニ」の前件「夜になる」は、夜というその時点だけを考え、
時間の幅が感じられないが、(22)の「～テモ」は、夜になるまでの時間を考えており、時間
の幅を読み取ることが出来る。これは、先も述べたように、「～ノニ」の前件には一回きり
の出来事が来るのに対し、「～テモ」の前件には繰り返し連続される、反復的な事柄が来る
からである。

なお、逆接確定条件「～ノニ」で文を終えることはできても、逆接確定条件「～テモ」で文
を終えることはできない。例えば、

(29) (一生懸命に努力すれば成功する、を想定して) 一生懸命に努力したのに。

における「～ノニ」を、「～テモ」に置き換えることはできない。また、先の(21)と(22)は、

「夜になれば、雪はやむ」を想定している文であるが、(21)は、「夜になったのに」で文
を終わらせて、想定文通りに後件が成り立たなかったことに対する不満を表わすことがで

きる。ところが、(22)は、「夜になっても」で文を終わらせることはできないのである。

さて、才田(1980)の次の例は、「～ノニ」の前後と「～ノデ」のそれが全く同じであるにも関わらず、逆接確定条件「～ノニ」と順接確定条件「～ノデ」が両方とも成り立っている。

(30) まだ日本語が十分でないのに、日本語で講演なんて出来っこありませんよ。

まだ日本語が十分でないので、日本語で講演なんて出来っこありませんよ。

このように、(30)の「～ノニ」文と「～ノデ」文が両方とも自然になるのは、次の(30')を見ても分かるように、「～ノニ」と「～ノデ」が指定する前件と後件が異なっているからである。

(30') [[まだ日本語が十分でないのに、] [日本語で講演なんて]] 出来っこありませんよ。

[まだ日本語が十分でないので、] [日本語で講演なんて出来っこありませんよ]。

つまり、「日本語が十分でない」「講演は出来っこない」という前件と後件から文が成ると捉えれば、これら二つの命題は順接の関係にあるため、「～ノデ」が妥当である。ところが、「日本語が十分でない」「日本語で講演する」という二つの事態から文が成り立っていると考えれば、これら二つの命題は逆接の関係にあるため、当然「～ノニ」が使われるのであり、「～ノニ」全体に「出来っこない」がかかるのである。さらに、

(31) お父さん、そこまで知ってるんなら、なんで典ちゃんを助けてあげへんの？

(花)

お父さん、そこまで知ってるのに、なんで典ちゃんを助けてあげへんの？

の「～ナラ」と「～ノニ」が両方とも成り立つのも、否定が後件の構成要素として入っているか否かによるものである。つまり、「～ナラ」の場合は「知っているのんなら助けてあげる」

という箇所全体に否定がかかっているが、「～ノニ」の場合は「知っているのに助けてあげない」のように否定が後件の構成要素になっているのである。このことから分かるように、文の論理構造を調べる上で大事なことは、何をpとし、何をqとするかを定めることだと思われる。

最後に、ある文がどのような論理構造を持っているのかということを考察する際には、文面に示されている意味構造のみならず、基底に隠されている意味構造をも合わせて考慮しなければならないということを付け加えておく。例えば、「rナラバpテモ～q」は、「pテモ～q」のようにrが省略されることがあるが、これを「pノニ～q」に置き換えることはできない。この場合の「～テモ」は假定条件であるため、「pノニ～q」に置き換えられないのである。さらに、「～テモ」と「～ノニ」を置き換えて、両文とも自然な文になるからといって、その「～テモ」文と「～ノニ」文が同じ論理構造を持っているとも限らない。

なお、本節で見てきた、前件に時間の幅があるか否かということや、どのような語句と共起するかということまで、論理式に組み込むことは難しいことであり、このようなことは前後文脈によって解釈するしかないであろう。

4 二つの条件を持つ条件表現の論理構造

4.1 「pノニqカラr」

「～ノニ」には、本当の後件が省略され、他の事柄が後件の位置に来る場合がある。次の例は、「pノニqカラr」のqが省略された「pノニr」であり、「pノニq」と区別しなければならない。

(32) でも昨日ごめんなさい。なんだか神経がたかぶっちゃって。せっかくあなたが来てくれたのに、悪かったわ。 (森(上))

(32)の「～ノニ」が想定していると思われる条件文から考えると、(32)の本当の後件は省略されていると見なければならぬ。そのため、(32)を、「～ノニ」の前の部分をF(p)、後ろの部分をF(q)として、単に「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim(p \supset \sim q)$ 」という論理式で示すわけにはいかない。つまり、(32)の想定している条件文を、文に現われている通り「せっかくあなたが来てくれれば、悪くない」と解釈することは出来ず、想定条件文の後件 $\sim q$ が省略されていると見るべきであろう。ところで、その $\sim q$ としては、例えば、「家にいる」「そのまま帰らせない」「何かもてなしをする」などが考えられ、省略される前の(32)は、

(32') せっかくあなたが来てくれたのに、家にいなくて、悪かった。

せっかくあなたが来てくれたのに、そのまま帰らせて、悪かった。

せっかくあなたが来てくれたのに、何のもてなしも出来なくて、悪かった。

などであると考えることが出来る。そして、これらは、「pノニqカラr」という形式であることが分かる。つまり、一見、qであるように見える事柄「悪かった」は、実はrに当たるものであり、rは、「pノニq」を前件とする順接確定条件の後件であるわけである。これらの組み合わせから、(32)の論理式は次のように表わせるであろう。

$$(33) \quad [(p \wedge q) \supset r] \wedge [F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)] \Rightarrow F(r)$$

後件が話者と聞き手の両方の共有知識である場合、(32)のように後件が省略されることがある。(32)は、場合によっては、例えば、「家にいなくて、悪かった」のように、前件が省略されることもあり得るが、これは、「 $(q \supset r) \wedge F(q) \Rightarrow F(r)$ 」という順接確定条件の論理式で表わせるものである。

4.2 「pナラqダガ、r」

次の例は「pナラr」形式の条件表現である。これは「pナラqダガ、r」のqの省略されたものであり、ただの順接仮定条件「pナラq」と区別しなければならない。

(34) ふたり残っていればいいという話じゃないの。一挙に四人、この栄光を味わった者でなければ、この空虚さは分らないでしょうね。しかも四人をランク付けするなら、上位ふたりに逃げられたのよ。 (女(下))

(34)は、「四人をランク付けするなら、誰某さんと誰某さんが上位に入るが、この上位ふたりに逃げられた」のような文から「～ダガ」の部分が省略されていると見られる。この場合の「～ダガ」の前の文と後の文の間に条件の論理概念はないため、「～ダガ」の代わりに「～ノニ」を入れ替えることはできない。そして、この「～ダガ」は、「ソシテ」と

置き換えられるもので、前件と後件を並列的に結び付けているにすぎない。「四人をランク付けする」を p、「誰某さんと誰某さんが上位に入る」を q、「上位ふたりに逃げられる」を r とすると、q の省略される前の(34)は、「 $(p \supset q) \wedge F(r)$ 」と表わされ、q の省略された(34)は、「 $p \wedge F(r)$ 」となるであろう。ただし、実際の日常言語は、「 $p \wedge F(r)$ 」の構造の文が「～ナラ」で表わされることもあるなど多様性に富んでおり、曖昧さが避けられない。

さらに、本当の後件の省略された「～ノニ」には、次のような例もある。

(35) もっと何かを言わなければならないのに、典子は自分の腕を振りほどかれないよう、力を込めるのが精一杯であった。 (花)

(35)において、p を「もっと何かを言わなければならない」とすると、q としては「何も言えない」などが想定され、「自分の腕を振りほどかれないよう、力を込める」は、(35)の「～ノニ」の後件とならない。これを r とすると、「 $p \supset q$ 」と「r」との関係は、

(36) $[F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)] \wedge F(r)$

という論理式で表わすことができよう。

以上のように、「～ノニ」が逆接確定条件を表わしていても、本当の後件は省略されて別の事柄が後件の位置に来る例は多い。このような「～ノニ」は、逆接確定条件の応用例として考えることができ、その論理式は「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$ 」と後件の位置に来ている「r」との組み合わせで表わされる。

5 本章のまとめ

逆接確定条件の言語形式には、「～ノニ」と「～テモ」があり、既知の前件を $F(p)$ 、既知の後件を $F(q)$ とした場合、「～ノニ」と「～テモ」は、「 $F(p) \wedge F(q) \equiv \sim (p \supset \sim q)$ 」と表わすことができる。つまり、「～ノニ」と「～テモ」は、文面では $F(p)$ と $F(q)$ が起こったということを表わしていながら、基底には p と q の食い違いを持っているのである。これは、同じ論理構造のものが「～ノニ」と「～テモ」といった異なる言語形式で現われる場合であり、第四章で見たような、「～カラ」が同じ言語形式で幾つか異なる論理構造を持つ場合とは対照的である。

同じ論理構造を持つ「～ノニ」と「～テモ」の相違点としては、「～ノニ」は時間の幅のない過去の特定の時と共起し、「～テモ」は時間の幅のある過去の特定の時と共起しているということ、「～ノニ」は「いくら」や「何、誰」と共起しないが、「～テモ」は仮定条件のときだけでなく確定条件のときにもそれらと共起するということ、「～ノニ」の前件には一回きりの出来事が表わされ、「～テモ」の前件には繰り返し連続される反復的な事柄が表わされるということ等が挙げられる。